

こころの救急箱 通信 第17号 2019年9月

発行：特定非営利活動法人 こころの救急箱 事務局：電話・FAX：06-6942-9092

Eメール cocorono9090baco@kpa.biglobe.ne.jp

URL <http://www.cocorono99baco.or.jp>

相談電話：06-6942-9090（月曜日夜8時～火曜日朝3時）



「近づきたい」

東京自殺防止センター

村 明子

起き抜けに鏡に映る自分の顔はびっくりするほどやつれている。夜間の自殺防止電話相談員になり長い時が経つ。昨夜話したあの方はこの朝を迎えられたのだろうか。相談の後の朝は言葉に尽くせない気持ちが交錯する。

いのちの危機に佇む方に出会うとき、相談員はいつでも丸腰のままだ。知識、常識、価値観や自分の経験はその方の苦しさを前に、何の助けにもならない。相談員はそれすら持たずに、自分の弱さも弱点も丸抱えしながらその方の抱える深い闇のような苦しい世界に深く分け入ろうとする。自分自身が安全な場所から動こうとしないと決して出会えない世界に踏み出すのだ。

「死にたい思いも強さも揺れ動くことがある。相談はそれぞれ全く違うの。だから、いろいろな個性の人が聞くことが大事。あなたの個性は大事ですよ」創業者西原由記子さんがボランティアにむけて発した言葉だ。有り難くもあり、避け難くもある個性を持つ自分にとっていつでも戒めでもあり、大きな慰めでもある。

死にたいと苦しみ続け、ほんのひと時相談につながる。「相談」は相談員にとってはすべてであるが、死にたい本人にとっては一瞬に過ぎない。このことを忘れないでいたい。時として、相談員はこの一瞬で何か解決できるのではないかと誘惑にかられる。そして話もそこそこに、どこかに「死なないための」魔法を探しに行ってしまう。先ほど入ったばかりの深い闇の世界を抜け出て。すると、死にたい人と相談員は離れてしまって別々の場所でやりとりを続けるはめになる。

その苦しさに近づきたい。その苦しい世界に留まりたい。言い淀んだ言葉、ためいき、長い沈黙、口調と裏腹な言葉、「死にたい」しか言えない苦しさ・・・聞こえてくるのはそんな断片かもしれない。その方にとっては今なにがどう見えているかを聴きたい。一緒に味わいたい。その方にとって死ぬってどういう意味なのか。自分も大きく心を揺さぶられながら。聴いていくうちにわずかな光に出会うことも多い。解決や希望とは程遠いが、苦しむことから生まれてきた強さであったり、打ち勝ってきた何かやその方のすごみであったりする。その方の力を見せつけられる。相談は通過点に過ぎない。